

## 甲賀三郎「電話を掛ける女」

—

その朝私は制服に着替えると口笛を吹きながら家を出た。下宿の婆さんが眼を円《佻る》くして、

「まあ、竹友さんは元気ねえ。よほど嬉しいことがあるんですねえ」

と言ったが、婆《ばばあ》なんか何にでも食われてしまえ、俺は今日時子に会うんだ、そう心の中で叫んで婆さんなどは黙殺してしまっ、大手を振って外へ出た。

若葉の候というものは何となく身内がゾクゾクするものだ。春はソワソワとして過ごしてしまうが、五月になると同じ浮々《らきうき》するうちに落ち着きができて、素肌に裕《あわせ》がピッタリつく心地が何ともいえない。まだ男を知らぬ処女のセルの単衣《ひとえ》にふっくりとふくらんだ胸に、恋心の神秘を包んで歩くのも今だ。

時子が私の電話を待ち焦がれているだろう、そう思って私は飛ぶように道玄坂を降りていった。

ところが、ああ何という呪わしいことだろう。坂道は足の踏み所に困るような泥濘《ぬかるみ》だ。私は外へ出て初めて昨夜《ゆうべ》から曉方にかけて雨の降ったことを思い出した。

道玄坂の泥濘、そんなことは少しも不思議なことではない。この頃の東京の郊外は雨が降れば往来がたちまち水田のようになるのは分かりきっている事実だ。けれども諸君、古い話だけれどもナポレオンがウォータールーの戦いでウェリントンのために一敗地に塗《塗》れたのは前日雨が降ったためだという。雨のために道が泥濘となり、砲兵隊の進行が予定通りいかなかったのが、ナポレオンの大打撃だったのだ。今の私の場合はちょうどそれで、道が悪かったために、私の生涯を通じて二度と経験することがないと思われる奇々怪々な事件に巻き込まれるようになったのだ。

というのは下宿の横丁から道玄坂に出ると、私のすぐ前に一人の若い婦人が歩いていた。むろん私は気が急《せ》いているのだから、すぐその婦人に追いついてしまった。ところが私は彼女をなかなか追い抜くことができない。彼女は女としてはかなりの疾足《はやあし》で歩いている。それがじつと背後《うしろ》からついてゆくにしては遅すぎるし、といて追いつくにはち

よっと足を早めなければならないという速さなのだ。私は一刻も早く自働電話のある所へ行きたいといらいらしているのだが、彼女を追い抜こうとすると、往来の真中の最もひどい泥濘の所へ磨きたての靴を踏みださなければならぬ。諸君もご承知の通り、道玄坂は交通の激しい所で、自動車や荷車がひっきりなしに通っている。人馬織るがごとしという所だ。その激しく行き交う自動車の間を抜けて、ハネをかけられながら、田圃《たんぼ》のような泥濘の中に踏み込んで、前を歩いていく女を追い越すということはちょっと骨が折れることなのだ。道玄坂の様子を知らない諸君は追い抜くには左の方へ回って、店やの軒下から行けばいいと言われるかもしれないが、道玄坂は道が大きく蒲鉾形になっているから、軒下の方はかなり急な斜面になって、ひどく歩き悪《にく》く、やはり疾足で歩いている彼女を追い抜くことは困難なのだ。

もし私がこの時前を歩いてゆく彼女が私と同じ自働電話を目指してゆくのだということをちょっとでも知ったら、どんな困難を犯しても彼女を追い抜くのだった。またじっさい彼女の後ろ姿がスラリとしていて、平常《ふだん》着の飾り気のない身装《なり》でありながら、どこことなく気品が溢れているので、前に出て顔が見たいという欲望も起こったし、彼女を追い抜くということがそんなにむずかしいことでもなかったが、前述べたような訳で少し億劫《おっくう》だったから、いらいらしながらも彼女のすぐ後ろにくっついて歩いていったのだった。

目指す郵便局前の自働電話に近づいた時に、私は本能的に彼女がやはり電話を掛けにゆくのだと直感した。私は心のうちでしまったと叫んだ。もしできたら彼女を押し退けて前に出て、一散に自働電話の中へ飛び込んだかもしれぬ。しかしまさかそんなこともできないので、以前の通りついてゆくと、果たせるかな、彼女はスーッと自働電話の箱の中へ入った。私は唇を噛んで、地団太を踏んだ。

本来なら私はすぐ箱のそばに行って、じっと彼女の電話の済むのを待ち受けていなければならないのだ。けれども私は妙に虚栄心のある男で、電話の箱のそばでボンヤリ中の話の済むのを待ってるようなことは、人が顔を見るような気がしてできないのだ。幸い他に後釜を狙っているものもなさそうだったので、少し離れた電信柱の陰に何気ない顔をして立っていた。

自働電話の中の彼女は悠々《ゆうゆう》と電話帳を繰りだした。彼女の横顔は透き通るように白く、眼鼻のよく整った私の想像していた通り気品の高い顔つきだった。私はちょっと彼女を崇拜した。だが、私はすぐにそれを取り消して、腹立たしさを感じた。というのは彼女の電話帳を繰る手がな

コメント [y 1]: 自働電話とは表現がとても古くてかえって新鮮です。携帯が当たり前の現代では起こらない設定ですね。

コメント [y 2]: おっくう(億劫)から転じたものだそうです。  
仏教用語で、一劫の一億倍で非常に長い時間のこと。すると、この「劫」というのがわかりません。しらべてみると、劫というのもきわめて長い時間のことだそうです。だから、億劫となると、きわめてきわめて長い時間になります。ほんとにめんどくさいです。

かなか埒《はかど》らないのだ。時子に電話をかけるように打ち合わせた時間は刻々に迫ってくる。私は気が気ではない。

ようやく彼女が受話器を外した。やがて何やら口を開いた。五錢玉を今に入れるかと待っていると、なかなか入れない、そして何町何番地と叫んでいる彼女の声が私の耳まで響いてきた。

ああ、彼女は五百番を呼んで電話番号を聞いているのだ。ちょっと、こんなことではいつ空か分かりやしない。ああ、私はどうして彼女を追い抜かなかつたのだろう。泥棒のためだ。畜生！ 道が悪かったばかりに彼女を追い越し損なって、先に自働電話を占領されてしまった。ああ、早く出ないか。時子は我が儘な女だから、約束の時間が過ぎると電話に出てこないかもしれない。私は箱の中に入っている娘を引き摺《ず》りだそうかとさえ思った。(電話はどこにでも借りるうちはあるが、私は話を人に聞かれないのだ！)

私はいらいらしていたので、いつの間にか電信柱の陰を立ち出て、電話の箱に近付いていた。そして聞くとともになしに彼女の番号を呼ぶ声を聞いた。

「ええ、四九七一番！」

局名は聞こえなかったが、何が四九七一番だ、畜生！ 早く掛けてそこを出ろ、こゝろ私は腹の中で悪態をついていた。

「ええ、いれますよ」

彼女の涼しい声でしたかと思うと、チーンという金属の触れ合う音が聞こえた。

「ああ、もしもし」

と彼女が言ったかと思うと、次の瞬間に彼女の調子が変わって、一種異様なアクセントで訳の分からぬ言葉を熱心に早口に喋りだした。私はあっけにと取られてしまった。

始めは英語かと思ったが、どうもそうではないらしい、と行って支那語でもない。フランス語ドイツ語そんなものはよく知らないが、どうもそれでもないらしい。もっとも外国語はこの他に幾種類あるか。露語もあれば伊大和語もあり、**西班牙《スペイン》**、ポルトガル、オランダ、ベルギーと数えれば限りがないが、とにかく一種異様な訳の分からぬ言葉なんだ。彼女は純粹の日本人らしいのだが、一体どうしたということだろうと私は不審に思ったが、次の瞬間にふと私はあることに思い当たると、愕然《がくぜん》とした。寒気が頭のとっぺんから足の尖《さき》までピクリと通り過ぎると、私は身体《からだ》を震わしたまま、そこへ釘づけになってしまった。

コメント [y 3]: 南ヨーロッパ、イベリア半島の大部分を占める立憲君主国。15世紀末に統一王国が成立して栄え、長らく広大な植民地をもった。日本との修交は安土桃山時代にさかのぼる。1931年共和国を樹立、36-39年の内戦を経て、47年フランコ総統の独裁体制が確立し、75年その死亡によって王制に復す。面積50万6千平方キロメートル。人口3921万(1995)。首都マドリッド。イスパニア。

国名の漢字表記には難読のものが多いですね。

比律賓。これはフィリピン。「比」という一字で表されることもあります。

それから、墨西哥。これもむずかしい。メキシコです。「墨」という一字がヒントですね。

私は何を思い出したか。

当時新聞紙上を賑わしていた不思議な事件、それはある富豪が毎日毎夜どこからとなく掛かってくる異様な呪いの電話に悩まされたという話は、読者諸君にはご記憶の方があるだろう。その電話は若い女の声で、支那語、英語、独逸語、フランス語、何語、何語と世界のあらゆる国の言葉で、物凄い地の底から洩れ出るような声で、その富豪を脅迫するのだった。(その老富豪はどうしてそれらの各国の言葉を聞き分けたか、新聞にはその説明がしてなかった)富豪はそのために極度の神経衰弱になり、警察では躍起となって脅迫犯人を捜査したけれども何の効果もなかった。

私の目の前にいるこの若い女がその犯人でなくて何者だろうか。もっとも新聞には地の底から出るような凄惨な声とあったが、この女のは鈴を振るような涼しい声だ。けれども新聞に書いてあったことは記者の形容かもしれないし、また脅迫されている者から聞けば天女の声も悪鬼《あくき》の叫びと聞こえるだろう。人通りの激しい、帝都でも何番目と指を折られている繁華な道玄坂の一角にある自働電話はかえって人目を忍ぶのに屈強だ。(自分も実はそれを利用してしているのだ)この自働電話でどこの国の言葉か分からない声で熱心に喋りつづけている異様な女こそ、あの新聞紙上に歌われている奇怪な犯人に違いない。

私が驚きのために、茫然自失している間に彼女は話を終えたと見えて、ガチャリと受話器を掛けて、扉を押し開けて半身を現したかと思うと、私の方を向いてニッと微笑《ほほえ》んだ。

あっ、私は再び立ち疎《す》んだ。おお、何という彼女の姿の気高さよ。後ろ姿と横顔とを見て美しい女とは思っていたが、かくまで整った品位のある、ほんとうに天上の神女が天降ったかと思われる程の美しさとは思わなかった。年の頃は二十二三と思われた。

彼女が私の顔を見て婉然として笑ったのはどういう訳か。おそらく彼女は私が電話の空くのを待っていたらしい様子を見て、その挨拶をする心持ちで私に微笑を送ったのだろう。それとも微笑が私に向けられたと思ったのは間違いで、電話の交渉が思う通り運んだのを北叟《ほくそ》笑んでいたのだろうか。しかし私は彼女の微笑のうちに一点の悪意を認めることができなかった。彼女が脅迫を試みていたというような憶測は、彼女の顔を見た瞬間にどこかへけし飛んでしまって、そんなことを考えたのが恥ずかしく思われるのだった。

彼女は私が顔面神経を硬ばらして、彼女の微笑に報いようともせず突っ立っているのを見てもかくべつ気にも留めないようで、電話の箱の外へ出

ると、クルリと元来た方へ向き変わって、軽く裳 《もすそ》を捌 《さば》いてサッサと歩いていった。ハッと思っただけ私 が振り向いた時には、飛び違う車 と人の間に彼女の着物の端がチラリと見えたり、それからどう見直しても彼女の姿は見えなかった。

#### 北叟《ほくそ》笑む

岩波国語辞典では「物事がうまくいったと、ひそかに笑う」と書かれています。イメージとしては、あまりきれいな感じがしません。

この「北叟（ほくそ）」とは「北のおじいさん」という意味で、この語源は「人間万事塞翁が馬」のことわざ話から来ているようです。

「塞翁が馬」の話は、ある時、塞というおじいさんが飼っていた馬が逃げていなくなっていました。それは大変だと、周りの人がおじいさんを励ますと、塞おじいさんは「こんなこともあるさ」とそんなに泣き叫びもしませんでした。

しばらくして、その逃げて行った馬が、彼女の馬を連れて戻ってきました。塞じいさんの馬が1頭増えたのです。そうすれば、また周りの人が「得したな」と騒ぎました。こんなときも塞じいさんは「こんなこともあるさ」と平然としていました。

馬が増えてからまたしばらくして、今度は、塞じいさんの息子がこの馬に乗っていて落馬して足の骨を折ってしまいました。するとまた、周りのひとが「可哀相に」と慰めますが、塞じいさんは相変わらず「こんなこともあるさ」と平然としていました。

そんな時に、国の徴兵があったんですが、息子は足を折っていたので兵役にいかなくてすみしました。このときもやはり「こんなこともあるさ」という塞おじいさんでした。

つまり、「人生の幸不幸は予想がつかない」という意味で使われることわざです。人生には禍福が背中合わせになって訪れ、何が幸で何が不幸か解らないから、それに一喜一憂しないで泰然としている様を表しているのでしょうか。そして、一人の時に（風呂でも入っている時にでも）良いことがあったときに「ちょっと微笑んだ」という感じが「北叟笑む」ということなのかなと思います。

<お多福の雑記帳

[http://jns.ixla.jp/users/otafuku946/heart\\_002.htm](http://jns.ixla.jp/users/otafuku946/heart_002.htm) より引用>

何という機敏さ、何という面妖 《めんよう》さだろ、私は再び彼女を疑いだした。

ふと振り返って自働電話を見ると、何ということだ、私がちょっと彼女の姿を見送っている暇に、もう見慣れない男が入り込んで、受話器を耳に当てて、もしもしと言っていた。

私は再びいらいらしながら、その男が呑気らしく、友達らしい通話相手とふざけ合っているのを聞いていなければならなかった。

ようやく電話が空くと、私は箱の中へ突進して、飢えた者が食物に飛びつくように、受話器に飛びついた。

時子は果たして不機嫌だった。たった十分ばかり待たしたのだったけれども、彼女はすっかり物 《す》ねてしまって、私をさんざん手こずらした。私は一生懸命に弁解した。もしや箱の外で聞いている人はないかとヒヤヒヤしたが、それからそれへと弁解の言葉に追われて、振り返って見る余裕は

なく、冷や汗をダラダラ流しながら、送話器に向かって必死の声を振り絞った。

どうやら時子を宥《なだ》めて約束通り午後から音楽会に行くことに決めて、ホッと溜め息をつきながら自働電話の外に出た。

快い朝日が道玄坂を一面に照らしていた。自動車や荷馬車が未来派の絵のように歪みながら通り過ぎた。そっくり同じ服装《なり》をした女学生が二人、足並みを揃えて、軽々とセル〔薄手の毛織物〕の袂《たもと》を翻して、小形の華奢な日傘を傾けながら、さっさと私の前を通り過ぎていった。

私は幸福で顔を輝かしてもどのように口笛を吹きながら、今度はゆっくりと彼女たちの後ろを追って道玄坂を降りていった。

#### セル〔薄手の毛織物〕

〔セルジの略。セルジを「セル地」と解して「地」を略したもの〕平織り薄手の毛織物。本来は梳毛(そもう)糸を原料とするが、絹・人絹などの交織もある。合着用和服地。〔季〕夏。《 》を着て病ありとも見えぬかな/虚子》

別のところでしらべると、下のよう書いてました。

毛織物のセルジ、サージから日本語に転訛した、経緯に細い梳毛糸を用い、平織で織られた先染の広幅の毛織物のこと。尾西(愛知県西部)が主産地で、以前は春先や秋口などの季節の変わり目に単仕立てにして用いたが、近年は少なくなっている。着尺地、和服のコート地、袴地などによく用いられる。ほかに綿セル、絹セルなどがあった。

1910年(明治43年)にセル地やメリヤス地の衿、男女とも流行し、ワニ革バッグ全盛だったそうです。

## 二

が、やっぱりその日は駄目だった。すっかり道玄坂の泥棒に呪われてしまったのだ!

約束の時間に約束の場所へ行ったけれども時子の姿は見えなかった。それから一時間ほど立ち尽くしたけれども、とうとう彼女はやってこなかった。彼女は私が朝約束の時間に電話をかけなかったのを気に障《さ》えたのに相違ない。ああ、泥棒の仕業だ、私は復興局の役人をこの時ほど呪ったことはない。(そういう人たちの責任だかどうだかよく知らなかったが)

時子は実に我が儘な女なのだ。時には意識してわざとやっているのではないかと思うように、小面《こづら》憎く勝手気儘を振る舞うが、一面にはお侠《おきゃん》なところがあって、心底には優しい気性が横たわっているので、

私はどうしても彼女から離れることができないのだ。

彼女は姓を谷山とって今年二十一だというのが、年よりも少し老けて見える。顔立ちはむしろ整わない方で、頬が出て口が大きく美人とはいえない。けれども、全体の感じが理知的で明るくて近代的で、じゅうぶん人を惹きつける魅力を持っているのだ。彼女はまったくの孤児で、現在伯母と呼ぶ人の家に寄寓しているが、実際は伯母でも何でもない他人だそうで、他に誰か彼女に仕送りをしている者があるようなのだが、彼女はそのことについては少しも言わない。まったくもって素性の知れない女なのだ。

彼女はある私塾の音楽教師のもとに通っている音楽生で、ふとした気紛れから私もしばらくその教師の所へ通ったのが縁で、彼女と知り合いになり、私はたちまち熱烈な恋を感じるようになったが、彼女は容易にそれを受け入れてくれないのだ。私たち二人の今の関係はいまだ恋人同士と呼ぶことはできない、ごく親しい友人関係なのだ。私は時々彼女に操縦されているのではないかと感じることもさえる。素性の知れない女に係わり合っているのは損だと思えることはあるが、私はどうしても彼女のことが思いきれない。彼女の前に出ると、すぐ卑屈な心になってしまって、意気地なく彼女の機嫌を取り結ぶことばかりしてしまう。我ながら愛想が尽きているのだ。

私はいま学生の身なのだ。父親はとうに死んで四国のある片田舎にいる母親から、父の遺産のうちを月々学生の身としては少し多すぎるほど送ってもらっている。親がかりの私立大学生の身で、時子のような女に係わり合っていることについて、どんな非難を浴びせられても、弁解の辞《とば》はない。じゅうじゅうよくないということを知りながら、止められないのは意志が弱いのかしら。

時子のことでは私は既に伯父と衝突しているのだ。**伯父**というのは東京にいる私の唯一の親類で、死んだ父の弟なのだが、彼は元長く検事をしていて。検事をしていたような男だから、淡々として生きながらのミイラのようなもので、現代人の心理などというものは少しも理解しない。いまだに旧幕時代の土分のような考えで、素性なんていうことを実に喧《やかま》しく言う。私が一度時子に結婚を申し込もうと思ってそれとなく郷里の母親に探りを入れると、母親がさっそく伯父に相談したから堪らない。たちまち伯父に呼びつけられて、そこは昔取った杵柄《きねづか》だ、名検事と持て囃された人だから、キウキウと糾問されて、とうとういっさい白状に及ぶと、威丈高《いたけだか》になって、そんな素性の知れない女と係わり合うなら俺の家の鬨《しきい》は跨がさせぬと言った。私も言葉の行きがかり上、何も伯父に養ってもらっている訳ではないのだから、そうですかと言って引き下がっ

コメント [y 4]: 「伯父」というのは東京にいる私の唯一の親類で、死んだ父の弟なのだが、」とある。

「おじ」には、「伯父」と「叔父」がある。

父母の兄にあたるのが「伯父」、父母の弟にあたるのが「叔父」である。

だから、ここは死んだ父の弟だから、「叔父」と表記するのが正しいと思います。